日本教育の崇高性

三枝樹正道

茲には過去にありし教育を述べるのではない。將來かくあるべく要請せらるゝ教育を述ぶるのである。又本當の教育の相を說くのであつて、現在の教育樣相を說くのではない。然し、その要請せらるゝ本當の相が過去に於ても現在に於ても、タトヒあらはには現實して居ないとは云へ、常に吾國教育の底流をなし、基礎をなしてゐるのである。それでこそ悠久にして千古不磨の文化を遺し、二千六百年の輝かしき歷史を有する日本國の嚴存となつてゐるのである。

今は極めて素描である。自分の觀察の儘を記するのみ。

一、教育の諸問題

二、明治の教育

三、『いのち』の原理

四、人格的自覺の段階

五、吾國教育の崇高性

イ、祖先崇拜

ロ、滅私奉公

六、練成道場

一　教育の諸問題

教育とは人を育成する作用である。かく云へば極めて簡單のやうであるが、茲には幾多の問題が內在してゐるのである。まづ第一に育成せらるゝものに關する問題がある。卽ちこれはあるがまゝの現實人に關する問題である。こゝに於て最も重要なる事項は、陶冶可能の限界、陶冶の時期等に關する問題である。第二には如何なる人にまで育成せらるべきやの問題がある。これは教育理想の問題である。ナトルプの謂ゆるあるべき人に關する問題であつて、人は如何なる生活內容を具現すべきものであるかは古來種々論ぜられてゐるところである。西洋の教育にあつてはルソー始めペスタロッチーの如き、その他批判的教育學に於けるナトルプ、文化的教育學の代表者シュプランガーの如きもこの教育理想に關しては深き關心を示せるものであるが、何れも抽象的なる人間の理性論に重要點を置いてゐる。又アメリカに於けるプラグマティストの如きは社會的有要人の養成を求めてゐる。かくの如くして或は知性の鍛練、德性の涵養、或は社會人の完成、人格の陶冶等と、問題は更に問題を發生してゆくのである。從つてこの教育理想に關して種々なる學說が現象してゐるのである。而して第三には育成の方法の問題がある。方法はその目的理想に適應して立てらるべきものである。從つて目的理想の差異によつて其方法論にも差異が考へらるゝものであり、茲に亦種々なる異說が發生するのである。又第四には陶冶の場所の問題がある。これは陶冶の時期と密接に關係するものであるが、それと同時に育成の方法とも關係深き問題である。

これらの諸問題は教育を論ずるに當つて一應は必ず考慮に入れるべき重要事項である。但し今茲には特に吾國現時

に於ける、あるべき教育の相の具體的實際問題に就て、これらの問題を限定して、些か考察して見ようと思ふ。

二　明治の教育

現在の日本教育を眺むるに便宜なる爲に過去の教育に就て一瞥を加へることにする。抑も明治の教育は、吾國文化發展の上に尠からざる貢獻を作してゐる。鎖國の日本をして一躍世界の日本となし、又、科學日本の建設に偉大なる足跡を遺し、產業日本の確立に不拔の基礎を築いたものである。然し乍らそれは知識(學問)の世界に於て、機械(工業)の世界に於て、經濟(商業)の世界に於て、その著大なる進步發展を齎せしものではあるが、人間そのものゝ價値の世界に於て、生命の本質相に於て、換言すれば、具體的歷史的現實在としての日本人の育成に於て、果してそれらに比例して著大なる貢獻の跡が認め得らるるであらうか、吾人は無條件には、これを肯定することを躊躇するものである。

思ふに明治の教育は西洋の教育の輸入であり、飜譯である點が非常に濃厚であつた。それは元よりその當時としては止むを得ない當然の事情であつたとは云へ、その結果、個人主義、自由主義、實利主義の思想が盛となり、吾國本來の眞面目である家族主義、共同態に於ける滅私奉公の武士道的精神が極度に曲められたことは否定することの出來ない事實である。元來十八世紀十九世紀を通じて歐米諸國に一貫して流れてゐた大きな思想は、個在觀念に基く思想であり、從つて物質尊重の思想であつた。自由主義と云ひ、個人主義と云ひ、その他實利主義、資本主義、共產主義等何れも個在觀念によつて底礎づけられたものであり、物質尊重の思想の上に建設せられたものである。

抑も個はそれを包容する全體を基底とし、それを媒介として始めて意義と價値とを有するものである。又全體は個をその內容として具有するものであり、個を通じて始めて具體的に活動するものである。個人と共同態との關係は全く此關係にして、兩者は不一不二、相互に相互を媒介として相互に現實化してゐるのである。而も兩者は相互に自己を否定的媒介として、他を肯定維持するものである。故に個人を包容し超克せない共同態は在り得ないと同樣に、共同態に基礎づけられない單なる個人は、又具體的現實ではない。又共同態は個人を通じてのみ發展擴充するものであると同時に、個人は共同態に沒入して而もこれを地盤として現實するものである。この嚴肅なる事實の上に立つて見るに、近世に流行したる個在を中心とし、個在觀念の上に建設せられたる總べての思想は、その根底に於て、既に大なる誤謬を犯してゐるものと云はねばならぬ。從つて、その結果として、その上に建立せられ、且つ發達せし諸種の文化は、眞の意味に於ける人類文化を、又人類社會の眞實なる幸福を、又眞實現代に生きる人間生命の向上擴充を齎さなかつたことは寧ろ理の當然と云はねばならぬ。

以上は原理の方面から眺めたる近代文化の誤謬を述べたのであるが、更に次にこれを現象の方面から考察すれば、科學の進步は確かに文化生活の向上を齎せしとは云へ、それと同時に、他面に於ては反つて鬪爭の激烈化を來し、自然界の利用開拓は、無限に伸展する本能的欲望に驅使せられて、反つて身體力の消耗を來し、經濟界の發達は、福利增進と共に、又營利思想の普遍化となり、利己主義の培養土となつて、人類社會生活の安寧を障害せしかの憾みがある。是れは卽ち教育が、前述の如き誤謬を、その根本に於て犯せし結果であつて、本來人間を育成すべき任務を有する教育が、人間を育成せずして、その屬性の一である單なる知識の增加を計るに苦心せし結果の一表現である。換言

すれば、歴史的現實在としての人間の具體的全體としての本質的陶冶を忘れて、徒らに、その枝葉末節である性能の養成のみが、教育の主要責務なりと考へられた結果である。

歴史的具體的なる人間の眞實相は、個人であると共に共同態員である。即ち具體的に云へば親であり、子であると共に家族でもある。私であると共に國民である。この國民である私、家族の一員である私、共同態員である個人の生命の陶冶が行はれない時には、如何に知能が發達し知識が增加するとも、それは恰も無能力者が多くの財物を所有して、反つて財物によりて苦勞すると等しく、人間の本質相眞實相に於ける價値の實現とはならずして、反つて單なる本能の奴隷としての生活が進むのみである。現在の個人主義的、實利主義的、唯物主義的文化は實にこの本能的慾望の奴隷としての生活發展に貢獻せしものと云ふべく、眞の人類の價値向上に對して、何等貢獻せし點なしと云ふも過言では無い狀態である。これは『いのち』の眞實相に契當せないからである。

三　『いのち』の原理

『いのち』に關しては生の哲學として多くの哲學者が既にこれを說明されてゐる。例へば、ベルグソンの『純粹持續』の如きは生命の基本的說明であらう。又デイルタイの『生』の概念の如きは內容に於て自然界精神界に亘つての極めて廣博なる鮮明であらう。然しこれらは何れも個人主義的、非合理的直觀的色彩が濃厚である。又シュプランガーやシュペングラーの如きは文化の相に於て人間の精神的活動のみを重要視せしやうに思ふ。然し今茲には一々これらの諸說に批評を加へる能力も餘融もないが、これらの諸學者の思想的影響も勿論蒙り、西田博士の謂ゆる『アガペ的統一』

として『行爲的自己の人格的自覺の上に顯るる生命』の哲學の教示を受けつゝ自分の想定する『いのち』に關して簡單に說明せんと思ふ。

さて『いのち』は吾人の思惟の及ぶ範圍內に於て無窮である。その最大なる表現を宇宙生命と云ひ、その最少限度の表現を生物の生命に見る。勿論無生物も生物の生命發展に參與する限りに於て、生命の一部を構成するものである。而してこの『いのち』は生々發展して止まらないものである。動物は『いのち』の生々發展のまゝに無自覺に生きてゐるものであるが、人間はこの生々發展を自覺の上に反省の上に經驗するものである。從つてこの自覺の程度に於て、反省の程度に於て、人間はその具體的生活內容を異にするものである。この意味は『いのち』を客觀的なる實在として自己に對立せしめるものではなく、宇宙の動き、卽ち宇宙間一切のものは『いのち』であり、若し假りに云ひ得るならば『いのち』してゐるのである。然も『いのち』が眞に『いのち』化するのは人間に於てゞあり、而も眞の『いのち』は眞實なる意味に於ける人格的自己の自覺の上に顯るゝものである。而して人間に在つても生理的人間から人格的人間に至るまで無數の段階がある。從つてかゝる差等に於ける人格的自己の自覺の程度に於て、その具體的生活を異にするものであることを云ふのである。

本來『いのちは』辨證法的發展をなすものにして、個の完全な自己否定に於て、共同態の中に完全に融合して肯定的存在をなし、又その共同態は完全な自己否定によつて更に個の中に沒入融合して個を生かすのである。かゝる飛躍的發展が繰返されて『いのち』は進展するものである。今この『いのち』の進展を、その最も著しい表現、吾人の生活に最も親しい一例として、人間の生命の進展に就て考察することにする。まづ人間は父母卽ち親から生まれる。是れは夫

婦一體の融合統一せる『いのち』の分裂發展の新階梯への飛躍であつて、茲に男女の何れかに分裂して進展するのである。是れが個の發生である。而してこの分裂した男女は何れにしても、その性が完全に發達すれば、卽ち個として完全すると、『いのち』の本來の性格によつて、兩者は融合統一せんと活動するものである。此場合人間の個としての結合には理性あるが故に禮を必要とする、これが婚姻の儀である。この婚姻の儀によつて、在來の男性女性は、夫婦となり、父母となり親となるに至つて完全に兩者共に自己否定を行ひ絕對一に統合するのである。而して更に『いのち』は子とし發展し再び男性か女性かの何れかに分裂進展する。かくて親は既に子にその『いのち』を委ね、『いのち』は更に次代へと發展飛躍してゆくのである。かくて一人の子への分裂發展には二人の男女兩性の親としての融合統一があり、その二人の親には又四人の兩性があり、かくして無數の人類の『いのち』への自己否定的貢獻があり、更に又一人の子は他の異性に對する自己否定的貢獻によつて、融合統一して再び分裂進展への『いのち』の發展過程を辿るのである。かくの如く一人間の生命には一切人類の『いのち』への自己否定的貢獻があるのである。加之一人間の具體的生活卽ち身心の具體的生活內容に至つては森羅萬象悉く各自に自己否定的貢獻をなしてをるのである。これ一人の一擧手一投足一呼吸にも一切の宇宙の全緣全生があると說く緣起の實相である。この自覺こそは眞の人格的自覺の完成と云ふべきものである。然るにこの自覺には人々によつて完不・熟未熟の種々の段階がある。この段階に就て次節に更に考察を進めよう。

四　人格的自覺の段階

凡そ人格的自覺は次の如き四段階に大別することが出來る。

第一は利己的個人主義の段階である。

これは生理的生物的心理的なる自己の存在を自己として意識するが、他人は全然他人として意識する段階にして、自己保存の本能のみが旺盛であり、他の一切のものはそれがタトヒ人であらうと、自己の生活擴充の手段と考へる人々を云ふ。生存競爭弱肉强食の世相は、この段階の人間の世界に現るゝ著しい現象である。近代文化をして現に見るが如き悲慘なる狀態にまで齎した大きな原因の一つはこの個人主義思想である。凡そ人類の慾望の最も原始的なるものは生命慾である。これが『いのち』の中心的なる表現であるが、この慾望は所有慾、私有慾となつて發達し、これらの慾望が擴充されるに從つて他にこれを調節すべき理性の發達がおくれる場合には支配慾、權利慾となつて現るゝものである。茲に『强いもの勝』の社會相となり、弱肉强食の鬪爭狀態を惹起するものである。『いのち』を自覺する程度の最も低い狹い段階である。

第二の段階は家族的個人主義の段階である。茲に於ては自己が家族にまで擴大された段階であつて、吾が家族に對しては一體感を有するものであるが、他人の家族に對しては明らかに異家族の感を抱くものである。人は親としては子供に對して、又兄弟姉妹は相互に、この一體感を所有するものであるが、隣家に對しては案外無關心であり、時には敵意をさへ抱く場合がある。これは『いのち』が辛く家族を通じて自覺されてゐる狀態である。卑近な例ではあるが過日まで吾國民の間にも現象した『買溜め』『賣惜み』等は正しく此程度の『いのち』の自覺に在る人々の行爲である。孝經にあるが如く『揚二名於後世一以顯二父母一』は孝の主要なる行爲であつて、これは吾家の歷史を尊重し、祖先崇拜の美德

の要素ではあるが、若しそれが爲に他人の家が顧慮されなかつたならば、それは誤れる見解であつて、『いのち』の實相を去ること未だ遠いものである。かゝる人は辛く家族内に於てのみ『いのち』を自覺し、これに參劃する人々である。

第三には民族的又は國家的個人主義の段階。これは民族の『いのち』國家の『いのち』を自覺する程度である。換言すれば彼等は自己の民族に於て、又は自己の國家に於て、人格的自覺に達せし段階であるが、但し他民族他國家に對しては、或は無關心、或は敵視さへすることがある。これらの民族又は國民は、彼等自身のみ『いのち』すべく正當視されたる一團であると自信して、他民族他國家は、その爲にいかに犧牲にならうとも、或はその爲に衰滅に瀕するとも考慮せない人々である。現時歐洲に見る世相はこの段階にあるものと云へよう。歐洲の歴史を見ると全く民族の興亡史である。彼等は自己の民族のあることのみを知つて、その興隆發展の爲には他の民族を征服して自己の慾望を達せんと盡力するものである。憾みに報ゆるに憾みを以てし、敵意に對するに敵意を以てする彼等の勢力の消長史は、全々個人間の鬪爭と異る點がない。この儘に推移するならば歐洲の平和は百年河清を待つも望みを達することが出來ないであらう。是れ彼等が眞の『いのち』の實相を自覺せない結果である。

以上の三段階は何れも個人主義的段階であつて、『いのち』の實相に諦達し得ない狀態にあるものである。これらの人々は何れも佛教的の表現を以てすれば我執の去らない人々である。從つて未だ緣起の實相を諦觀せない人々である。勿論緣起は宇宙の實相であり『いのち』の實相である。これを諦觀するとせないとに拘らず『いのち』は緣起してゐるのであるが、而も亦只だこれを諦觀しえた人のみが眞の『いのち』の緣起實相の世界にあるのである。この意味に於て、彼等が『いのち』を完全なる意味に於て人格的自覺せない程度に相應して、『いのち』は完全にその實相を顯現して

をらないのである。

第四の段階は八紘一宇の自覺である。これは『いのち』の完全相の人格的自覺である。即ち人間は元より、生物、森羅萬象一切のものは悉く『いのち』進展の參劃者であつて、その一を他の爲に當然の犧牲とするが如きは『いのち』本來の相を沒却せるものであると自覺する段階である。從つて此段階にあつては、生存競爭、弱肉强食の慘狀はなく、共存共榮相互扶助の平和相が實現するのである。神武天皇の即位建國の大詔は、正にこの御自覺を吾國民に垂示されたものと拜承する。爾來二千六百年吾國の歷史はこの大詔實踐の過程であつたのである。現時の事變に於ても、歐洲に於ける侵略征服とは異り、聖戰を續け、多大の困難を忍んで東洋の平和に、更に世界の平和新秩序の建設に邁進してゐるのも、この尊き精神の發露である。本來吾國には敵はない、只『いのち』の進展を自覺せずしてこれを阻むものを反省せしめて、その本來の實相を自覺せしめんとする運動はある。これは『いのち』そのものゝ進展過程である。これが外國に對しては現在東亞共榮圈の確立に精進せる相であり、國內にあつては國民の各自が各々其職能を通じ億兆心を一にして肇國の精神に添ひ奉らんと努力せる相である。即ち吾國こそは『いのち』の實相を如實に自覺し、實踐せる國家である。是れ即ち八紘一宇の精神の實現である。

但し茲に一言すべきことは、人はタトヒかくの如き自覺にある日本人と雖も自己の生命維持に際して、他の動物植物の生命を必要とするものである。これは『いのち』の一面たる共存共榮に相反する現象の如くに感ぜらるゝが、他の一面たる進步發展に必然的內具する矛盾相である。故に若し動植物に『いのち』の自覺があるならば、當然その自覺を促して、恰も國民の各自が國運の進展に自ら進んで自己否定的貢獻をなして、以て國家肯定の一役を演ずるが如き活

動を發起せしむるのであるが、動植物はかゝる自覺を有せない爲に、一見强いて犧牲を要求するが如くに感ぜらるゝのである。然しさりとて、これは個人主義の西洋人の如く當然の權利として動植物の生命を奪ふのでは絶對になく、生命の進展に生命を必要とする『いのち』の必然的內具の矛盾を自覺せない動植物を一は憐愍し、一は感謝して、彼等をして更により大いなる、より中心的な『いのち』の進展に貢獻せしむるのである。茲に『ものを有り難く頂く』『萬物に感謝する』『勿體ない』の思想となり、從つて總べてのものを大切にし、いかに微細なものと雖もそこに宿る『いのち』を認めて拜む合掌生活の實踐となるのである。かゝる意味に於て、眞に『いのち』の實踐は八紘一宇を旨とする吾國に於て、始めて現實し、又眞に『いのち』の原理は佛敎の緣起實相に完具してゐるのであると云ふことが出來る。

五　吾國敎育の崇高性

前二節に於て『いのち』の原理及びその自覺の段階に就いて略述せしが、かくの如き宇宙間最大の動きであり、精神界に於ける最深の自覺に契當する理想を有する吾國の敎育こそは實に崇高なる性格を有するものと云はねばならぬ。今茲にはその崇高性を祖先崇拜と滅私奉公の二點に於て考察することゝせん。

1、祖先崇拜

吾國は神の肇め給ひし國家であつて、諸外國の如くに征服略奪によつて成立せし國とは全々その在り方に於て異るものである。卽ち君先民後の國家と云はゝ所以である。故に道德に於ても、忠孝一本が國民道德の中核をなすものである。諸外國に於ける國家道德の最高中心は、多く正義の德であるが、吾國にあつては忠誠である。又その家庭道德

の基本は一般に親愛であるが、吾國にあつては孝行である。蓋し正義は兩者の相對々立を豫想するものであるが、忠は君に對する臣の絶對至純なる歸依精進である。而もこのことは、畏くも陛下が　皇祖皇宗に仕へさせ給ふ大御心にその範を仰ぎ奉ることが出來、その聖旨に隨順し奉り、大御心を安らぎ奉る所に、忠の本義を完ふすることが出來るのである。畏くも　陛下は常に躬を以て　皇祖皇宗の御遺訓に遵ひ給ひ、事ある毎に、まづ　皇祖皇宗歷代の列聖の御靈代を安んじさせ給ふ次第と洩れ承る。誠に恐懼の至りである。國民はこの畏くも躬を以て垂範し給ふ　上御一人に對し奉り、ひたすらに、宸襟を惱し奉らざらんことを念願するのみにして、只々叡慮によつて導かるゝことを畏みこれに添ひ奉らんことを衷心より勵むのみである。是れ諸外國の如く單に統治せらるゝ人民とは雲泥の差ある所以である。即ち諸外國に於ける政治は單なる統治であり、制御であるが、吾國に於ては　神勅に明らかなるが如く、政治は知らす意味にして、吾國本來の眞面目を知らしめ給ふのである。茲に神ながらの國の自覺が生じ、眞の臣民道の實踐があるのである。かくの如く吾國に於ける君臣の關係は飽くまでも單なる統治者と被治者との關係の如く、冷やかなる正義の德によつて結合せられをる關係でなく、畏れ多きことながら師表と門下との關係の如き暖かき一體感的關係にあるものである。

又家庭に於ける親愛の德は、親より子に至る德であるが、孝行は常に子より親に向ふ純眞憑依の情に基礎をおくものである。一家は親がその子に、又その家族に示す愛情によつて統率せらるるものでなく、反つて親が、その祖先に對する至孝至順によつて、よく統理せらるゝのである。即ち一家は、親か子に對す愛情のみによつて、これを統御せんとすれば、子はその愛情に馴れて秩序は亂れ、上下の區別もなく、遂に愛に溺るゝに至るであらう。又親が親權によつ

て、或は戸主權によつて、その一家を治め導かんとするならば、その家族は決して圓滿に隨順するものではない。そこでは唯だ權利義務の冷い關係が、辛じて一家を統御し維持し得るのみである。故に、一度その權利權威が弛緩すれば、その一家はタガの切れた桶の樣なもので收集のつかない狀態となる。この兩關係は何れも吾國家庭の本來の相ではない。卽ち吾國家庭本來の相は、親はその祖先に誠心誠意仕へることによつて、その子孫一統を敎導すべきである。親は至心に祖先を崇拜し、敬虔に祖先に奉仕することよつて、その子孫一統に、人間として『いのち』の進展に參劃する崇高なる生活の範を垂示することが出來るのである。而して子孫は又かゝる示範に準じて親に至心に仕へるのである。祖先に仕へざる親に仕へる子孫は殆んどない。本能的なる盲目愛に應ずる本能的なる依賴の情はある。然しそれは理性を有し從つて禮を有する、人格的自覺に達し得る結合ではない。祖先に對して敬虔に奉仕する親にして、始めて子孫に對して正しき指導權と暖かき慈愛を具有することが出來るのである。

今同樣の例を他人を使役する集合家族に於ても見ることが出來る。卽ち主人を尊敬し、主人の心を心とする、而も店の全責任を自ら負ふ番頭にして、始めて涙もあり知もある家內統制を爲し得るのである。主人に逆き主人を無視する番頭は、いかに權力を行使するも、いかに愛情を施すも、眞に丁稚小僧を信服統御することは出來ない。

かくの如く吾國に於ては、指導者は常にその自己の個我に執着せず、從つて君はその臣を、又親はその子を私有化せずして、祖先の子孫であるとの信念の許に敎導するのである。これ個は自己否定によつて共同態に沒入することによつて、反つて共同態全體として更生する如く、指導者は祖先に對して無我になり空になつて信順する刹那に遠き祖先に全體融合して、反つて祖先の威と愛を身に具現するのである。換言すれば自己否定して『いのち』に順隨すること

によつて、眞に『いのち』の進展に貢獻しうるのであつて、茲に子女の教育が完ふせらるゝのである。是れ近時、ブーゼマン・ポップ等により環境の整理、示範による陶冶が强調せられ、又崇高なる教育愛が多くの文化教育學者によつて叫ばるるが、それらは何れも吾國の祖先崇拜によつて擴充せらるゝ教育であると云ふことが出來る。

尙ほ終りに一言附加すべきことは、吾國に於てはこの祖先崇拜は、やがて祖先と等しくならんとする思慕の情で信順の奉行であるが、これが『ひと』(日迹)たる自覺に至る時、天照太神への歸信となり眞の日本人の自覺に達するのである。

ロ、滅私奉公

次に吾が日本教育の崇高性として擧ぐべきものは、滅私奉公の精神並に生活の完成である。吾國は前述の如く、君先民後の國家であり、紀記にある如く、神あつて國土を經營せられ、人民を經營せられたのである。而も西洋の思想の如く絕對神が人を、國を作つたのでなく、『いのち』進展の理に順つて神が生み給ふたのである。此點は實に尊い國體と云ふべきである。かくの如く吾國は個人卽ち人民があつて、然る後國家が成立したものではない。これ征服による國、契約による國とは全然その基本條件に於て異るものである。故に吾國にあつては君臣の關係は、神の御稜威と臣民の敬慕との極めて素直な而も自然的必然的な、內的直接的なる紐帶による結合であるが、餘他の諸國にあつてはそれは權力又は法律による作爲的な、外的間接的なる紐帶による結合である。

かくの如き國體であるから吾國は吾民一體とも云はるゝのである。然しそのことは國土國民は全く神の御稜威の下に緊密なる統合をなしてゐる、更に極言すれば御稜威の許に融合沒入してゐるとの意味である。從つて國民の眞實な

る相は、國民の各自が自我を全然沒却して、卽ち自己否定して、一億一心となり、國家に一致隨順する相でなければならぬ。約言すれば滅私奉公の態度である。是れ肇國以來、種々なる國難に遭遇しつゝも、事ある每に萬民翼賛一死報國の至誠となり、天壤無窮の皇運を扶翼し奉つて來た相である。

一粒の籾が萠芽して完全に發育するには、籾自身がまづ完全に新生の苗に融合沒入せねばならぬ。卽ち絕對に自己否定を行ふことによつて、始めて次代の完全なる自己肯定が行はれるのである。これは又軍神として渴仰せられ、全國民の尊崇の對となつた人々の精神・態度を見るに充分察知することが出來る。例へば楠正成公にしても、廣瀨中佐、西住大尉にしても、何れもその思想行爲の中には一點の私心もなく、全然國家と一體となり、完全なる自己否定によつて大御稜威の許に沒我せし人々である。若し假りに、これらの人々にして、その心中の一偶にでも、一楠、一廣瀨、一西住の我執の片鱗でも殘存してゐたならば、決してかくの如き純眞無垢なる活動は出來ない。卽ちこれらの人々は全身全靈を捧げて、國家に奉仕したのであつて、是れ全く滅私奉公の相である。小我卽ち我執を捨てて、大我卽ち國家に自己否定を媒介として更生したものである。かくて國家に生れ、國家と共に生き、國家と共に輝くのである。これでこそ國家の續く限り不滅の功績として、國民の師表となり、よく國民の指導統率が出來るのである。この完全なる自己否定による國家への沒我的なる獻身、而して又唯だそのことによつてのみ、積極的大活動をなし得る滅私奉公の生活こそは、實に臣民道の實踐的中核をなすものであり、指導精神である。この崇高なる沒我的精神及び獻身的態度こそは、實に大乘佛敎の無我的生活相にして、何等の犧牲をも感ぜない犧牲的行爲こそは菩薩道の實踐である。

かくの如き滅私の行爲こそは、吾國臣民の　天皇に對し奉る眞實忠誠なる相である。吾國民は、この相に徹せし時

に眞に心の安らかさを自得するのである。これは又『いのち』に個人の生命が隨順したる相にして、個人としての生は生とならず死は死とならず、唯だあるものは『いのち』の進展のみあるの狀態である。人一般として云へば轉迷悟入せし相であり彌陀救濟による安心立命の相であるが、眞の人格的自覺者は必ず國民であるから、吾國民にしてかゝる宗教體驗者であるならば必然的に『いのち』の眞の意味に於ける具現である天壤無窮の皇運に自己否定的献身をなし得る忠誠なる國民となるべき筈である。

かゝる生活への誘導こそは、吾國民教育の理想であり、且つ又民心の至情に觸れた教育である。此度の聖戰に於て多くの應召者に見る、大義に殉ずる崇高なる歡喜の相、偉大なる滅私の活躍は、この吾國民の三千年の傳統になる至純高潔なる歴史的教養によるものにして、是れ亦吾國教育の崇高なる所以である。これが又大和國民の自覺の生活である。

六　練成道場

前節に於て吾國教育の崇高性に就て略述せしが、本節にては更にかゝる教育を行ふべき練成道場に關して一瞥することゝせん。

その第一は家庭である。家庭は現在に於て最も勝義の具體的共同社會である。而もそれは無自覺にして本能的である點に於て素朴ではあるが、直接的なる强き人格的接觸が行はれてゐるのである。本來家庭は、夫婦なる性緣と、親子なる血緣との兩關係による『いのち』發展の本質的性格に基く結合にして、人類が人類として、具體的生命を受くる

最初の場所にして、又最後まで、その生命を托する場所である。單なる生物としての人間が、教養ある精神の所有者としての人間にまで育成せらるゝのは、この家庭に於てゞある。即ち家庭には哺育と教育との兩作用がある。前者は本能的自然的に發生するものであるが、後者は精神的自覺的に行はるゝものである。殊に家庭に於て重要なる任務であり、又他の動物の親子關係と異る優秀なる點は、後者即ち教育作用である。

さて『いのち』の進展に關して、個人に最も具體的にして、接近せる關係にあるものは家庭である。從つて個人にとつて最も直接的にして親密なる祖先は吾が父母であり、又最も愛情的體感的なる子孫は吾が子である。かく親子の關係に於ては、極めて明瞭に且つ最も具體的に、祖孫の生命關係が顯示せられてをるのである。故に親の養育の本能による子女への親愛と、子女の親への思慕の情による孝養とは、其儘に於て直接的に融合して、吾國民の崇高性なる性格の一象徴である祖先崇拜、祖孫相續の意識的生活々動の基底をなすものである。故に吾國の家庭に於ては、古來國民的家庭行事としては、天照皇大神を祭つて毎朝禮拜し、又正月及子女の誕生には氏神に參拜して祖恩を感謝すると共に、現在の幸福を喜び、將來の發展を祈念するのである。又近畿地方に於ては婚姻の年に又は新年には伊勢神宮に參拜する習慣があり、又私的家庭行事としては、佛壇を莊嚴して祖先の靈位を安置し、朝に禮拜夕に感謝の勤行を捧げて、日常生活の基本的作法としてゐるのである。(但し現在の都市生活者の家庭に於ては明治の排佛毀釋の運動の結果と歐米の個人主義思想、基督教文化の影響の爲に、この良習は著しく損害せられてはをるが、それは吾國家庭の本來の相ではない。從つて現にこれは昔に復歸せんとする傾向を現してゐる)かゝる雰圍氣の中に『いのち』の進展の本質的性格たる血緣による愛情は、更に意識的に陶冶せられて、祖先崇拜の信念の確立となるのである。是れ家庭が崇

高なる日本教育を行ふ第一の場所と云ふ所以である。

更に又家庭は前述の如く性緣による夫婦としての結合である。これは『いのち』の進展過程に於ける分裂者の融合契機である。卽ち前述の如く、子として分裂せし個體は、一定の時間的經過の間に、漸次、男性か女性かの一方的性格を明瞭に表現して發展するものである。而してかく分裂せる男女の兩性は、各自の本質に於て充分に發育すれば、生ける生命は茲に兩者の完全一致融合して新しき生命力へ發展せんとするものである。これが性緣による結合である。（勿論茲には前述の如く、人間の親子關係には哺育の他に教育がある如く、人間の夫婦關係は禮によるものである。）この場合兩性は兩性としては相互に自己否定的融合して、絕對一の親となるのであるが、それ又同時に夫婦として、父母としての自己肯定となるものである。是れ夫婦は一體と云はる半面に『夫婦有別』の禮を存して、家庭道德の一德とする所以である。この夫婦に於ける男女兩性の自己否定的結合であると同時に夫婦肯定の關係こそは、滅私奉公に於ける自己否定の個性と全體肯定者として盡す自己との關係に比すべきものである。卽ち、家庭に於ける夫婦の別は男女兩性としての別でなく、それは既に生命の融合統一飛躍發展の過程に於て、全々自己否定しをるものである。かくの如き夫婦一體にして別ある和親融合の家庭に於てこそ、滅私奉公の精神及生活は養成せらるるのである。故に吾國家庭の本來の相こそは、實に日本臣民練成の最良最初の道場であると云ふべきである。

次に學校は臣民練成の第二の道場である。學校は正しく自覺的に日本臣民の教養修練を施すべき道場である。卽ち學校に於ては教育に關する勅語を奉戴し、これに基いて被教育者を教育すべき場所であつて、勅語に明瞭に臣民道の理想實踐が垂示せられてをる。家庭に於ては兩親の每日の生活そのものが、直接子女の身心陶冶の主體となるのであ

るが、學校にあつては既に兒童と雖も理解力を有するものであるから、その理解力を通じて、勅語に垂示せられた臣民道の理想相を體現せしむるのである。勿論教師の精神的態度は教育者としての資格を必具すべきことは當然であるが、家庭に於ける父母がその生活の全面に於て、直接的に子女の教育者であつたのに比すれば、茲に於ては、勅語を通じて陶冶が行はれるのである。勅語に垂示されたる第一は敬神崇祖の御精神であり、第二は億兆一心の滅私奉公である。こゝに燦として輝く吾國體の崇高性が顯示せられてあるのである。吾人はひたすらに、この御聖旨によつて學校教育の完成せられんことを念願するものである。

學校あつては、かくの如き謂ゆる日本精神が中心となつてあらゆる臣民道の實踐原理が自覺の上に明瞭に具現せられて、兒童生徒が教育せらるゝのである。家庭に於て、兩親が共に祖先を中心として、その祭祀によつて一家が統率指導せられ、謂ゆる家族なる共同社會の爲に共同献身するが如く、學校にあつては、勅語を中心として、そこに垂示せられたる大御心を體して、教師と生徒も融合し統率せらるゝ所に、その教育の中樞があるべきである。從つて一切の心身の鍛錬はこの臣民の育成を目標として施さるべきである。

從來の學校教育は歐米の文化の移入に急であつたが爲に、誤つてこの本質的要件を輕視し、反つて外國知識の吸收に、外國思想の移入に盡力せし結果、日本人にして世界的個人、又は抽象化されたる個人の育成に終つた如き結果となつたのである。學校の實權を外國人に委ねた支那の如きは、現在支那人にして自國文化を輕視し、自國語を蔑視して、その精神內容は英米佛人であるかの如き奇異なる現象を現してゐるのである。家庭教育が吾國民を育成すべき道場である。家庭に於て吾が血統の純潔が保持せられしことに就て祖先に對して無限の感謝崇敬が捧げられ、そのこと

自體が常に家庭教育の根本に一貫せる崇高なる精神力であると等しく、學校に於ては、吾人は吾民族の『いのち』に於ける純潔、文化に於ける優秀性・皇統一系の萬代不易の崇高性が自覺せられて、そこに國民的感激、民族的躍進の基本が體現せらるゝのである。かくて始めて吾國學校の臣民修練の道場としての眞義が現されるのである。

第三に臣民修練の道場として社會がある。これは既に教育卽臣民教育を終了せし人々の集合場所であつて、家庭學校の如く教育者があつて具體的現實的に教育が行はるゝ場所ではないが、尙ほ皇運扶翼すべき臣民としては、世界の進運に伴ふて自ら自己を練成せなければならぬ。その道場が卽ち社會である。

家庭及び學校に於ては、未だ活社會に獨立生活ずる日本人の準備的練成の域を脫せなかつたが、一度學校を卒業すれば正しく活社會に於て實際活動を營まなければならぬ。然し乍ら教育の聖業は單に學校に於て終了せしものでなく實際の活動を通じて益々『いのち』の中に伸展せられねばならぬ。これが自學自習である。而してかゝる自己教育自學社會にあつても、日本教育の崇高性は一層明瞭に具現化せられるのである。卽ち各自の職能を通じて國本の培養に、國力の增進に、國勢の發展に盡すことは自己の職能を通じて祖恩に報ずることであり、且つ主我的利己的觀念を離れて一つに國家の要求する能力を、その自己に適應せる職能を通じて發揮しゆくことは滅私奉公の訓練である。かく考へる時に社會も亦日本臣民の練成道場としての役割を荷ふものである。